



西小校長室だより

令和7年度 6月号

(文責 妹尾)

【※西小ホームページのアーカイブを抜粋・加筆しています】

心に刻んだ修学旅行の思い出

5月22日(木)、6年生の修学旅行がいよいよ始まりました。早朝 6:30 からたくさんの保護者の皆さんに見守られながら出発式を行い、バスに乗り込みました。バスの中でも元気な子ども達。ガイドさんの話にも被り気味に反応しています。前日の夜はあまり眠れなかった人もいたようですが、生涯の思い出となるこの旅行を、有意義に過ごそうと決意した出発式でした。



平和記念公園に到着すると、まず追悼記念館で被爆体験伝承者の柴田武志さんから、韓国人である李さんの被爆と差別について、実話に基づいたお話を聴きました。被爆の悲惨さだけでなく、人としての生き方にまで言及してお話いただきました。終始真剣に聞き入る子ども達でしたが、どのように感じたのでしょうか。



その後は原爆資料館を見学し、ガイドさんの説明を聞きながら公園内も回りました。資料館では物々しい様子から怖いと感じた子どもも多かったようですが、被爆の惨い現実を突きつけられた瞬間でもありました。韓国人慰霊碑にも手を合わせるなど、事前の平和学習に併せ、心を動かす学びになったのではないかと思います。



平和記念公園を後にした修学旅行団は、一路宮島へ向かいました。フェリーに乗り込むと子ども達のテンションは爆上がりです。気持ち良い海風を浴びながら、すれ違う別のフェリーに盛んに手を振っていました。



日本三景の一つの宮島、そして平清盛が整えた社殿の厳島神社を巡った後には、待ちに待った商店街でのお土産タイムです。テンションマックスでした。お小遣いをほぼ使い切った人もいれば、ほとんどを2日目に残している人もいました。もちろん正解はありません。



予定通りホテルに到着し、夕食タイムです。1日目はたくさん歩いたので、相当お腹も空いていた模様。「まだ食べちゃダメですか」と待ちきれない子もいました。広島食材を使った料理に舌鼓を打ち、楽しい会食を堪能しました。各部屋割りには3~4人ですが、それぞれの部屋を行き来しながら楽しい自由時間を過ごしたと思います。



2日目の午前中は研修です。JFE 西日本製鉄福山工場の見学をしました。私たちの生活には欠かせない鉄は、鉄鉱石を炭素で還元し石灰石と高炉で混ぜるのだそうです。この高炉が4機あるのは日本でここだけです。真っ赤に熱された鉄を圧縮して延ばす行程を、全員ヘルメットをかぶり高い通路を歩きながら見学しました。日本で唯一新幹線のレールを作れるここ福山工場で、鉄の熱風を肌で感じながらの研修でした。ちなみに工場内は撮影禁止でしたのでバスのみの写真となりました。バスの中でのヘルメットを被る小学生の姿はどう表現していいのかわかりませんが…不謹慎ですが…おもしろい！



修学旅行団、最後の活動場所は、福山市にある遊園地「みろくの里」でした。12時頃に到着した時点での来園者はまばらで、まさに貸切り状態。アトラクションも乗り放題でした。午後からは他の修学旅行団などが続々と入園してきましたが、西小の子どもたちの中では「先にガンガン乗り物だ！」派と「混む前に食事だよ」派に分かれていたようです。家族で遊園地に行ったことがある人もいますが、友達とはしゃぐ遊園地はまた違う楽しみなのでしょう。しっかり満喫した子どもたちでした。



この2日間の修学旅行で劇的に子どもたちの何かが変わるわけではありません。しかし、この子らが大人になったとき、思い出の1カットとしてしっかり脳裏に焼き付いていると思います。事前事後の平和学習も含め、大きな心の財産・ストックになってくれたらうれしく思います。



新たな水泳学習 ～ラソンテ～

今年度から雲南市の多くの学校が水泳学習を加茂 B & G ラソンテで行います。このプールを初めて使う子どもたくさんいますし、教職員も初めて使う人がほとんどで



す。事前に綿密な打ち合わせをして万全な安全対策のもとで水泳学習に臨みました。水泳初日となった5月27日(火)には、子どもも教師も両方が緊張感の中で学習しました。

水深が学校のプールより深いため、毎時間赤台(水深調節台)を沈めて行います。1・2校時は2・3・4年生、3・4校時に1・5・6年生とにこにこ・わくわく学級が入りました。



低学年は小プールを使用しています。またこの日は松江から来てくださった水泳指導員の方にも指導していただきました。まずは水難事故防止のためにも水に慣れることが大切です。中にはスイミングに通っている子もいて、バタフライや背泳ぎなどを披露してくれる場面もありました。自分なりの目標をもってしっかり水慣れし、泳げるように練習していきたいと思います。

伝統のロードレース

今日の午前中に、毎年の恒例行事となっている校内ロードレースがありました。保護者の皆さんも大勢かけつけてくださり、力強い声援をおくっていただきました。



1年生にとっては初めてのロードレースです。「最後まで頑張るぞ!」「オー!!」と気合を入れてスタートしました。こども園の前では園児たちが自作の旗を振って「かんばれー!」と大はしゃ

ぎで応援してくれていました。低学年から中・高学年と学年が上がると走る距離が長くなります。子どもたちの中には『〇位以内に入る』といった順位の目標を立てて



いた人が多くいたようですが、順位には表れない頑張りの要素がそれぞれのレースの中に詰まっていたのではないかと思います。『最後まで本気で走ってよかった』という感想がたくさん聞かれました。

苦しくてあきらめたいけど、歩みと走りを止めずにゴールした踏ん張りを褒めてあげたいと思います。みんなよくがんばりました。そして熱いまなざしと声援をくださった皆さん、ありがとうございました。

読み手と聞き手が触れ合う時間

火曜日の朝の活動時間には、読み語りボランティアの

方々に本の読み聞かせをしていただいています。6月3日(火)の朝も、1年生から6年生、にこにこ・わくわく学級まで、それぞれの教室が普段の様子とは違った雰囲気を醸し出していました。静寂ともまた違う静けさで、固唾をのんで話に聞き入ったり、笑ったりしながら読み手と子どもたちとの距離が縮まっていくのを感じました。きっと子どもたちの姿をイメージしながら選書をしたり、抑揚のつけかたなどを練習されたりしているのだろうと想像すると、ボランティアの皆さんには頭が下がります。子どもたちは潤った朝とともにこのあと学習に向かえます。これからもよろしくお願いします。



森林教育の中で

島根県では森林保全の大切さを学ぶ教育プログラム

として「みーもスクール」を実施しています。西小学校でも NPO 法人「もりふれ倶楽部」(宍道町ふるさと森林公園内)と連携し、6月3日(火)には佐藤仁志先生をお招きして4年生が学習しました。佐藤先生は島根大学の先生でもあります



が、日本野鳥の会の元理事長で、日本各地で自然環境保護活動をされてきた方

です。様々な肩書をお持ちで、樹木医もされています。4年生たちは西小にもいるコウノトリをはじめ、様々な野鳥についての話を聞き、また森の働きなど



についても学びました。その後全員が(結構高価そうな)双眼鏡を手にし、学校の周りの鳥たちを観察しました。そしてさらに、学校の敷地内で巣作りをしているツバメの観察もしました。このツバメは、数が減り絶滅危惧種にもなりそうな「コシアカツバメ」なのだそうです。自然環境を守る視点での「総合的な学習の時間」ですので、子どもたちには、今後も学びたいことを主体的に探究していってほしいと思います。

やっぱりおいしい!

6月4日(水)の1校時目からにこにこ・わくわく学級の子どもたちが、2日前に自分たちで取りにいた笹の葉を使

って笹巻づくりを行いました。3名の地域ボランティアや保護者のみなさんがかけつけてくださり、笹巻の先生としてご指導もしてくださいました。米粉をこねたり、笹をくるむひもを用意したり、茹でるお湯を準備したりと、子どもたちは役割分担をして臨んでいました。



最大の難関は、捏ねた団子を笹に巻く作業です。かく言う私自身も、初めての体験です。みなさんに教えてもらいながら何とか10個くらい巻けました。子どもたちはやはり苦戦。その分、保護者やボランティアの方々の熟練の技が光っていました。醍醐味は茹でたての笹巻を食する時間です。砂糖醤油やきな粉をつけ、おいしそうに頬張る姿はまさに幸せそのものでした。たくさん作ったので家に持ち帰ったり、職員室の先生方に販売したりした子どもたちでした。



町たんけん ～春殖地区～

6月6日(金)に2年生が春殖地区の町たんけんに出かけました。最初に龍雲寺の住職さんのお話を聞き、鐘もつかせてもらいました。次に(有)オートボディ・ケイに行きました。車検や車の修理、整備だけでなく車両販売やリース販売、レンタカー貸出業務など幅広くて手掛けておられる会社です。今やっている



作業などについてもいろいろお話を聞くことができました。そして次に春殖の交流センターに行きました。子どもたちからのたくさんの質問に、センター長から一つ一つ丁寧な説明を受けました。ここが災害時の避難所にもなることや、一人住まいのお年寄りの方の相談をしたり、子どもたちの勉強会やサマースクールを開いたり、カルタ大会などのイベントを企画したりすることも聞きました。地域の子どもたちが元気にやってきてくれることが一番うれしいと聞き、「行きたーい」と張り切る子らでした。最後は渡部製材所に行きました。作業中ではありましたが、木を切って乾燥させ、木材として使えるようにする過程について分かりやすく教えていただき、実際に間近で作業を見たり触ったりもさせてもらいました。お邪魔させていただいた皆様、本当にありがとうございました。今後の学習に生かしていきます。

幡屋体育館感謝祭

幡屋地区の振興会において、防災・福祉・教育等の地域づくりの活動拠点として利用されている幡屋交流センターがあります。昭和43年に建設された施設ですので老朽化が進み、耐震性やバリアフリーの面でも安全性、利便性の確保が難しくなってきました。令和元



年には建設準備委員会、令和4年には検討委員会を立ち上げられ、今年度新たに幡屋交流センターの建設が具体的に進むようです。そこで、建設予定地となっている旧幡屋小学校校舎及び幡屋体育館(旧幡屋小学校体育館)は解体することとなりました。6月8日(日)は朝から「幡屋体育館感謝祭」が開かれました。2週間前から体育館内外には住民や大東高校の生徒などによる「感謝の落書き」が描かれ、当日の感謝祭は和太鼓で幕を開けました。カラーリングなどのニュースポーツやグランドゴルフなどイベントでも盛り上がりしていました。西小の子どもたちもイベントに参加したり、屋台やキッチンカーを楽しんだりしている姿が見られました。新しくできる交流センターでも、きっと元気な子どもたちや住民の方々の笑い声が響くことでしょう。



備えよ常に ～救急法講習～

6月9日(月)に6年生を対象にした心肺蘇生の救急法講習を実施しました。講師に雲南消防署から救急隊員をお招きし、ご指導いただきました。子どもたちが蘇生処置をすることはあまりないかもしれませんが、大事な家族が目の前でもしもの事態に陥ったら、子どもであってもその大事な命を救う措置を知っておくことは必要です。講習では主には一次救命処置である「胸部圧迫と人工呼吸」「AED」について学びました。その中で家に一番近いAEDの場所を訪ねられました。取りに行ける距離なのか意外とわかっていないと思います。確認してみてください。放課後には教職員の講習も行いました。胸部圧迫などの処置だけでなく、実際に非常事態の状況を想定し、発見から状況確認・人集め・役割分担・119番通報・処置など、どのように連携して動くのかをロールプレイの中で確認しました。実際の場面では動揺しパニックになることも考えられます。子どもの命を守るための大切な訓練です。今後も意識を高くもち、いつ起こるかわからない事態にも備えたいと思います。



夏の初めのハーモニー

6月13日(金)に雲南市小中学校連合音楽会が三刀屋文化体育館「アスパル」にて開催されました。午前、午後の2部制で行われ、西小は4・5年生が午前の部で発表しました。練習をしっかりとってきた自信はあっても、大きな会場で大勢の観客を目の前にすると、やはり心臓は高鳴ります。出番が後の方だったこともあり、自分た

ちの曲をイメージしながら他校の発表に耳を傾ける様子がうかがえました。さあ、いよいよ出番です。ややこわ張った表情でステージに上がる子どもたち。まずは合唱曲「世界を旅する音楽室」です。一人一人のきれいな



歌声が重なり素敵な世界を作っていました。合奏曲は「アフリカンシンフォニー」です。軽快なリズムの中に、打楽器と鍵盤・リコーダーなどが強弱をつけなが



ら絶妙にコラボした素晴らしい演奏でした。何より、発表し終わって席に帰ってきたときの、ホッとして満足した顔が印象的でした。「出来栄えはどう思う？」とある子に

聞いてみたら、「うーん、101%」と答えてくれました。100%は超えているものの、120%や200%程ずば抜けてもいない。真意は私にはわかりません。私からは、

校長所感 ～多様性と主体性～

「競争させれば子どもたちは伸びる」という考え方があります。他者よりどれだけ良い点を取り、どれだけ抜きん出ることが重要で、他者に勝つことが幸せにつながると子どもたちに信じさせるわけです。しかし、この考え方は本当に幸せをもたらすでしょうか。元武蔵大学教授の武田信子氏は著書で、日本の民話「さるかに合戦」を例に、次のように解説なさっています。「現在の日本の教育は、登場するカニ、栗、臼、蜂、牛糞といった個性的メンバーに、一律に国語や算数、英語を教え、仲間うちで競争させているかのようだ」と。たしかにこの「5人」を同列に比較することに教育の意義を感じません。しかしこれが少なからず日本の教育において「子どもの伸びや成長」を評価する実態のようにも思えるのです。

カニや栗、臼たちのように、人はもともとそれぞれの個性を持っています。民話の中ではそれぞれがそれぞれの力を発揮して敵討ちをします。そもそもコミュニティというものは、多様な人たちが混ざり合い、それぞれができることを持ち寄って活性化するものです。持っている力には差があり、一人の力はたかが知れています。自分には何の力も無いと思っている人もいるでしょう。しかし、弱い立場にある人も、自分にもできることがあると実感することで、そのコミュニティにとって必要不可欠な存在になっていくわけです。

つまり、パーフェクトな人間が少数いるより、それぞれ違うコンピテンスを持った人間が複数いた方が新たな知が生まれる可能性があると考えられます。子ども一人一人には必ず多様性があるわけで、学校は比較と競

争に基づく評価のあり方について、まだまだ変えていく必要があるように思います。

脳科学に主眼を置いて書かれたある書籍の中に、こんなエピソードが載っていました。

『Aさんは進学塾に通い、勉強を一生懸命頑張って、学校の算数のテストで100点を取りました。「100点取るなんてすごい。本当に嬉しいわ」と両親は大喜び。ところが数日後、国語のテストで70点を取ってしまいます。帰り道、Aさんがゴミ箱に答案を破り捨てる姿がありました。一年後、Aさんは不登校になりました。』

えっ何で？こんなことで？と思われるかもしれませんが、同様のケースは意外と多いのだそうです。「すごい」「うれしい」のような褒め言葉が、「これだと良い」「これだと悪い」という評価の基準をつくり、「100点取るなんてすごい」は「100点でなければダメ」というメッセージにもなり得るからなのです。

また逆に、「叱る」ことに固執してしまうケースも多いようです。叱ることで相手の望ましい行動を生み出していると感じる体験は、叱った人自身に強い充足感を与えます。自分にとって正しい行動、あるべき姿が目の前に現れると、「自分の行為には影響力がある」という自己効力感を得るのだと思います。しかし、ここには大きな落とし穴が存在しています。「叱ると気持ちよくなってしまふ罠」です。叱ることは相手を変えるための行為であると考え、自分が叱ることで相手が行動を改めれば、「処罰感情の充足」というごほうびを受け取るわけです。

もしも学校教育の中で、この罠にかかってしまうと大変なことになります。学校とは、ややもすると治外法権とさえ感じられる特殊な場所であり、独特のルールに従い、規則のための規則が横行しやすい側面があります。叱る基準が教師の主観となってしまうと、子どもたちの主体性など高まるはずもありません。

そもそも「主体性を育てる」とはどのようなことなのでしょう。学校教育の命題かのごとく使われるこのフレーズですが、元々子どもは主体性をもっており、自分たちで育んでいくものなのかもしれません。逆に教育の中で、元々ある主体性を摘み取ってしまっていないかと危惧するケースもあるように思います。自分で考え、自分の思いを優先して行動しようとしても、決まりや約束が多過ぎてできない。「失敗してもいいんだよ」と言いつつも、失敗してもいい教材の予備がない。「自分で考えて選んでいいよ」と言いつつも、選択肢がない。また、幼児期にまで遡って考えると、朝来て「今すぐにも遊びたい」と思っているのに、全員が揃わないと遊べないルールに縛られている、等々。

何のために、そして子どものどこを見て褒めるのか、また叱るのか、私自身も今一度じっくり考え、より主体的な子どもの育成と自律を促していきたいと思えます。

学校のホームページの「児童の様子」を日々更新し、子どもたちの様子をお伝えしています。どうぞご覧ください。